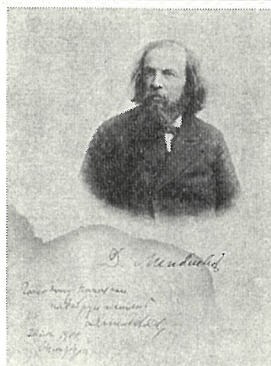


# メンデレエフの写真



自筆サインのある  
メンデレエフの肖像写真

加藤 延雄

七月のある暑い日、私は校友砂川氏と谷山牧師の仲介で中瀬古邸を訪れた。毎日クラーク館で顔を合わせる青木、竹内、松井森中諸先生のお供をして故先生の遺品を拝見し、かつ、いたただくためであった。同先生の長女角谷英子さんが待つておられた。故博士の遺品はさきにその大部分は同大図書館に、故和子先生の遺品は女子大に寄贈された。この度は故博士の日記、来簡、原稿その他を若干いただくことができた。

あの中瀬古化学研究所の高い天井の下に幾列もならんでいる大書棚の間を歩いてい

ると、一枚の写真が一つの書棚の横にかかっていた。一見学者——偉人らしい風貌の——とわかる人物像である。サインでこれは大化学者メンデレエフとわかった。筆者は中学生のころ福井大三郎先生からメンデレエフの発見した元素周期律を学んだが、ちようと冥王星の存在が予言されていた後に発見されたように、化学界にあってもメンデレエフは一八六九年元素周期表を作った時、所々空所ができるのを見て、これはおそらく当時まだ未発見の元素の占めるべき所であろうと考え、その存在や性質を予言していたが、彼の生存中にガリウム、スカンジウム、ゲルマニウムが発見されて同周期表の信頼性を高めた。彼には他に多くの有益な研究があった。

メンデレエフはシベリヤのトボリスクで生れたが、同地の高校長であった父が早く失明したため、母の働きでペテルブルグ大

学師範科を出てクリミヤで中学教師を勤め、再びペテルブルグ大学に帰り化学を専攻、選ばれて仏独両国に留学、帰国後母校の教授となった。晩年大学を退き度量衡局長を勤めた。

中瀬古氏は奈良県南部山嶽地方の出であるが同志社普通学校卒業後同志社ハリス理科学校で下村孝太郎氏について化学を学び、転じて米国ジョンズ・ホプキンス大学で研鑽を積んだ。微量分析、生物化学を専攻、長命の研究も進めた。第二回目の外遊の際ロシヤに立ち寄り、かねてあこがれの老学者メンデレエフに会うために露語を学んだほどであった。氏は語学の天才で数カ国語に通じ、外語を学ぶことを楽しんだがその真理探求の情熱はわれわれの範として敬意を払うべきものであろう。

中瀬古博士は多芸多能——筆者は少年の頃同博士のバイオリンを聞いたことが幾度かある。——の士ではあるが同志社が同博士を行政面でその精力を過度に消耗させたり、不当な待遇をすることなく、科学に専念することを許し得たならばと惜しまれてならない。

角谷英子さんはこの記念すべきメンデレエフの写真と中瀬古博士の胸像を進んでわれわれの前に取り出して同志社に寄贈され、その保存を依頼されたのであった。

(同志社新島研究会常任委員)